國立成功大學 106 學年度碩士班招生考試試題

系　　所：台灣文學系

考試科目：外文文學文獻解讀（日文）

考試日期：0213，節次：4

※ 考生請注意：本試題不可使用計算機。　請於答案卷(卡)作答，於本試題紙上作答者，不予計分。

1、閱讀下列文章回答問題。(25%)

「泡が語りかけてきます」

というキャッチ・フレーズが目に付き、そのわきに、ギネスのびんとグラスが色刷りになっていた。…広告の文章としてもこれは陳腐としか思われぬが、それはそれとして、そのかすかに異様な表現形式が私の関心一秒ほどつなぎとめた。主語と述語の異質性がいくらか読者の好奇心を引いたといってもよい。

「声が突然ところに落ちた。」落ちたまま、じゅうたんの短い毛にねばって動かなくなる。ストーブだけが、金網の中で小さくピチピチ鳴った。その音は、部屋の中の熱い空気に突き刺さろうとしては、室内の沈黙に押し戻されてすぐところに落ちた。誰も、何も言わない。（黒井千次『走る家族』）

今までにぎやかに交わされていた家族全員のおしゃべりが急にとぎれ、突然沈黙がおそった、その情景である。これは小説の言語である。…

ところで、「泡が語りかけてきます」と、「声が、突然ところに落ちた」とは、意外なほど構造が似ている。…いずれもカテゴリー変容形式のうちの、前者は擬人表現で後者は擬物表現だ、ということになるだろう。名づけただけで秘密が解明したわけではない。素朴な記号論の用語で言えば、記号表現が記号内容から乖離しそうな、表現面の歪みの現象だとも言える。そして、もうちょっと精密な記号論なら、表現コードからわずかに逸脱した記号表現によって、意味コードから僅かに逸脱した記号内容—新しい認識—が造形された、と言えるだろう。（佐藤信夫『レトリックの記号論』p. 249-252）

問題：以上佐藤信夫によれば、広告文である「泡が語りかけてきます」と小説表現である「声が突然ところに落ちた。」の二つの文には、レトリック的な記号論上での相似構造があるとのことである。その似ている構造を中国語に翻訳し、説明しなさい。

2、翻譯下列文章為台文或中文。(25%)

ティモシー・モートンが提唱するエコロジー思考は、ただ自然環境の悪化を問題化し、その保護ないしは保全を主張するものではない。彼は、環境の概念を、私たちをとりまき、その生存の支えとなっているものとして捉えようとする。環境問題は人間が自らの手で作り出した環境（人工環境）にかかわる諸問題でもある。モートンは、環境は、私たちがこれまで自然と呼んできたものではなくなっていると考えている。「私たちの足の下の地面は、水と空気ともども、永遠に変化してしまった」。つまり、自然と人間が区別されるが切り離されない状態にあって

一つの過程をなすものとして、環境を捉え直そうとしている。
（篠原雅武「自然なきエコロジーは、ホーリズムなきエコロジーである」『現代思想』2014、42（Ⅰ）、54 ページ）

3、下記の引用文を読んだ上で質問に答えてください　(25%)

・・・文化はもともと、人為的な事項なのだから、その速度も任意に手加減できる筈に違ひない。しかしこの場合、任意は個人のそれではなく、全體のそれでなくてはなるまい。新しい文化創造は、個人の力があづかつて力あり、その限り、に於て、天才の出現は、文化創造の原動力をなすとしても、全體としての文化水準の引き上げは、よく一個人のなし得る處ではない。

・・・文化の速度を加速度的速さにするには、そう云つた、個人の努力や制度の完備の他にあるものがプラスさねばならぬ。それは云はゞ文化意欲とでも云ふべきものであらうか？

—澁谷精一「日本精神・その他」、
『臺灣文學』第三卷第二號所収、1943 年、112 頁より—

問：引用文中「文化創造」、「文化水準」ないし「文化意欲」とあるが、それぞれは具体的に如何なるものを意味しているのか。また、「個人」と「全体」との用語もかなり用いられているが、その両者の関係については如何なる前提に基づいて論じられているのか。できるかぎり歴史的現場その当時の文芸的ないし文学的な状況を配慮しながら、引用文の時代的文脈に即して簡潔なマンダリンを用いて説明してください。

4、下記の引用文をわかりやすいマンダリンに訳してください　(25%)

・・・ソシュール以来の概念を受けながら、フーコーは『知の考古学』（1969）のなかで、ディスクールを、ある社会集団や社会関係によって規定される〈ものの言い方〉や〈表現、論述〉だと規定している。フーコーによれば、表現活動の最小単位はエノンセ（発言行為）であり、エノンセが集まってできたものがディスクール（言説）にほかならない。しかし個別の発言行為だけでは特定の意味を生み出すことはない。そうした発言行為が、どのような規則に従って言説となるのかが問題となる。そこでフーコーが提示したのが、言説を形づくる形式としての言説編成体（formations discursives）という概念である。

・・・フーコーにとっては、話す主体が、どのような時代環境や社会環境のなかに置かれているかによって、言説そのものの意味が異なってくるのである。つまり言説の背後にいてそれを支配する主体は存在しないことになるので、この考え方は、“主体の死”ないし“主体の終焉”として受け止められた。

—今村仁司など編輯『岩波 社会思想事典』、
岩波書店、2008 年、82～83 頁より—